

慢性腎炎、腎不全の疫学に関する研究 —まとめ—

伊藤 拓

都立清瀬小児病院 腎内科

小児期腎不全の治療は、近年の透析、移植治療の技術的進歩により、著しい改善が得られており、学童では成人とほぼ同等の成績が報告されている¹⁾。しかし、低年令児での成績はなお不良であり、未解決の問題も残されている²⁾。更に、透析、移植治療により社会復帰が可能となった場合にも、小児腎不全に伴う発育障害のため、或いは患児に対する社会の無理解、偏見のために、患児の享受し得る生活の質「quality of life」はなお十分とは言えない。

今回の報告の中で、伊藤、鳴海、高田の施設別臨床検討、宮原らの5施設協同疫学的集計結果からも、腎不全小児が、発育障害、社会的発達の遅れに加え、社会復帰にも問題があることが指摘されている。更に、腎疾患の早期発見、早期治療により腎不全への進行を阻止しようとする、学校検尿システムが、小児期腎不全の1/3以上を占める腎尿路奇型の早期発見には不十分であることも指摘されている。今後、これらの問題点についての研究、検討が必要である。

更に、前述の如く、低年令児（特に乳児期）における血液透析、腎移植術は技術的に困難であったため、Hurley³⁾の如く第3の選択イコール死とする考えもあった。しかし、飯高らの報告のように、最近では小児CAPDにより、乳幼児の延命も可能となり、発育を待って移植を行うことも出来るようになりつつある。

このような治療技術の進歩によって、近い将来、乳幼児においても、透析、移植による社会復帰への道が開かれると期待されるが、なお問題として残るのは発育、発達障害である。腎不

全に伴う発育障害は、透析に導入されても十分に改善されないため、早期に腎移植に移行させ、腎機能の回復による発育を期待する考えもある²⁾⁴⁾。

しかし、免疫抑制剤として長期に使用される副腎皮質ステロイド剤は、強い発育抑制作用を有するために、移植後もなお十分な発育(catch up growth)は難かしくhealthy dwarfとして患児を悩ますことになる⁵⁾。よりよい発育を期待するためにはス剤の早期減量、あるいはス剤に換わり得る薬剤の開発が必要であるが、cyclosporineはこの種の薬剤として最も期待されているものである。

都築らは、小児腎移植におけるcyclosporine使用例で良好な腎生着率を得るス剤減量の可能性を示唆しており、今後、更に、多数例での検討が続けられることを期待したい。

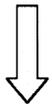
以上、今年度の研究に主として、小児期腎不全治療の現状を把握し、今後の研究の基礎的dataを得ることにあった。

次年度よりの本研究班の目標は、このような基礎的dataより抽出された腎不全治療の問題点の解決を図るとともに、更に、新しい試みとして、小児腎不全の食事療法の検討を行うことにある。成人領域で試みられてきている低蛋白、低燐食は腎不全の進行を遅らせることが可能と言われており、小児期腎不全治療においても極めてattractiveな研究課題である。

それ故、本年度より小児の発育を考慮した適切な腎不全治療食基準を作成し、軽症腎不全を対象としたprospective studyを行い、その効果を検討する予定である。

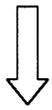
文 献

- 1) Combined report on regular dialysis
and transplantation of children in
Europe XIII 1983
Proc EDTA-ERA 21:69 1984
- 2) Fine R.N
Renal transplantation for children
Kidney Int 28, Suppl 17:5-15
1985
- 3) Hurly, J.K.
Kidney transplantation in infants
J. Pediatr 93:538 1978
- 4) Ingelfinger, J.R., Grupe, W, E.,
et al
Growth acceleration following renal
transplantation in children less
than 7 years of age
Pediatrics 68:255 1981
- 5) 伊藤 拓他
腎移植后小児の発育について
腎と透析 13:141 1982



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



慢性腎炎,腎不全の疫学に関する研究一まとめ一

伊藤拓

都立清瀬小児病院 腎内科

小児期腎不全の治療は,近年の透析,移植治療の技術的進歩により,著しい改善が得られており,学童では成人とほぼ同等の成績が報告されている 1)。しかし,低年令児での成績はなお不良であり,未解決の問題も残されている 2)。更に,透析,移植治療により社会復帰が可能となった場合にも,小児腎不全に伴う発育障害のため,或いは患児に対する社会の無理解,偏見のために,患児の享受し得る生活の質「quality of life」はなお十分とは言い難い。今回の報告の中で,伊藤,鳴海,高田の施設別臨床検討,宮原らの5施設協同疫学的集計結果からも,腎不全小児が,発育障害社会的発達の遅れに加え,社会復帰にも問題があることが指摘されている。更に,腎疾患の早期発見,早期治療により腎不全への進行を阻止しようとする,学校検尿システムが,小児期腎不全の1/3以上を占める腎尿路奇型の早期発見には不十分であることも指摘されている。今後,これらの問題点についての研究,検討が必要である。

更に,前述の如く,低年令児(特に乳児期)における血液透析,腎移植術は技術的に困難であったため,Huley³⁾の如く第3の選択イコール死とする考えもあった。しかし,飯高らの報告のように,最近では小児CAPDにより,乳幼児の延命も可能となり,発育を待って移植を行うことも出来るようになりつつある。

このような治療技術の進歩によって,近い将来,乳幼児においても,透析,移植による社会復帰への道が開かれると期待されるが,なお問題として残るのは発育,発達障害である。腎不全に伴う発育障害は,透析に導入されても十分に改善されないため,早期に腎移植に移行させ,腎機能の回復による発育を期待する考えもある 2)4)。

しかし,免疫抑制剤として長期に使用される副腎皮質ステロイド剤は,強い発育抑制作用を有するために,移植後もなお十分な発育(catch up growth)は難かしく healthy dwarf として患児を悩ますことになる 5)。よりよい発育を期待するためにはス剤の早期減量・あるいはス剤に換わり得る薬剤の開発が必要であるが,cyclosporine はこの種の薬剤として最も

期待されているものである。

都築らは、小児腎移植における cyclosporine 使用例で良好な腎生着率を得る薬剤減量の可能性を示唆しており、今後、更に、多数例での検討が続けられることを期待したい。

以上、今年度の研究に主として、小児期腎不全治療の現状を把握し、今後の研究の基礎的 data を得ることにあつた。

次年度よりの本研究班の目標は、このような基礎的 data より抽出された腎不全治療の問題点の解決を図るとともに、更に、新しい試みとして、小児腎不全の食事療法の検討を行うことにある。成人領域で試みられてきている低蛋白、低磷食は腎不全の進行を遅らせることが可能と言われており、小児期腎不全治療においても極めて attractive な研究課題である。

それ故本年度より小児の発育を考慮した適切な腎不全治療食基準を作成し、軽症腎不全を対象とした prospective study を行い、その効果を検討する予定である。